

平成三十年・国指定重要民俗文化財

## 長崎くんち 今年のみどり(其の三十一)

越中 哲也

一、はじめに

長崎の開港は二十六聖人記念館の前館長パチエコ神父(日本名・結城神父)の論考によると、一五六七年当時、口之津の教会(島原有馬氏所属)にいたトレス神父が、新たに大村氏によって開かれた福田の港にアルメイダを派遣、その途中アルメイダは長崎氏のもとを通り布教を開始、一五六九年十一月長崎の地に最初の教会トードス・オス・サントス教会を創立、信者は一、五〇〇人を数えた。(トードス教会の場所は現在の夫婦川町・春徳寺)

以来、長崎の地に良港がある事が認められ、新たに一五七一年(元龜二)春頃より森崎の地(旧県庁の地)に「岬の教会」を中心に次の六ヶ町を地割し、新しい町を開いている。

大村方面より移住してきた**大村町**。大村純忠の実家島原有馬方面より移住してきた**島原町**(明治以後に**万才町**と改む)。外海(福田・神浦方面)より移住してきた**外浦町**。平戸方面より移住してきた**平戸町**。横瀬浦方面より移住してきた**横瀬浦町**。地役人を住ませた**分知町**。

そして、当然の事として、大村氏配下長崎氏を含む二十五氏の所領地の住民は全てキリシタンに改宗させられ、其の地の社寺は全て廃された。但し当時は、長与氏のみ巖屋大権現信仰を中心に改宗しなかった。

その後、長崎の町のキリシタンが豊臣秀吉の命により禁止され、長崎にあった全ての教会が廃されるようになったのは、一五九七年(慶長二)二月五日長崎西坂の丘で二十六聖人の殉教が行われて以来の



「諏方三取明神」  
—長崎古今集覧名勝図繪より—

で親しまれたという。

傘鉾のダシは氏神(諏訪神社)に雅楽を奉納する意を込めて、秋の紅葉の下に樂人の用具を配している。奉納踊は前回同様、同町で先々代の頃より舞踊を教えておられる藤間金彌先生の御指導で、町内子供連中の先引と華やかな恒例の本踊が奉納される。

○**出島町** 戦前の出島町は、オランダ屋敷の伝統もあって**おくんち**の奉納踊に参加されなかったが、戦後昭和二十八年より参加されている。傘鉾のダシも奉納踊も全て、出島オランダ屋敷に因んだもので、長崎異国趣味を表現したものととして長坂の皆さんを含め大変好評であり、「モツテコーイ〜」の声が何度もかかっていた。

○**東古川町** 古川町は東古川町の他に本古川町、西古川町の三ヶ町があり、昔は貿易荷上げの地として一番賑やかな中島川沿いの町であった。町内の天満宮の鳥居に「寛永十八年二月(一六四二)川副町」と刻してある。昔は**川副町**と言っていたのでありましょう。傘鉾かざり、奉納踊り共に町名に因んだもので「昔の人はよく考えてありますね」と町の人達は私によく語りかけられた。

○**小川町** 長崎開港の頃、当時の荷上げは船津町であり、其の隣が小川町である。この町には立山より流れ下る小川があり、其の小川の水を船人達は大いに活用していたそうで、町は賑やかであったという。戦後、同町が奉納踊を復興されたのは中山正会長・毛利利明委員の頃からであった。傘鉾は昔のように小川に因んだ昔の型を復活し、小川の岸に立つ白さぎ、打網、魚籠そして川岸を背景に、奉納踊は牡丹の花の下、獅子舞にしましたと御連絡をうけた。大変高評な奉納踊りでした。

○**本古川町** 昔は古川町の本通であったという。この町の傘鉾は、先輩方より「趣向された物が傘鉾に置いてあるが解かるか」と言われた。それは神前に奉納される神楽用具の中に「古い皮を使用した太鼓や鼓がある事」だそうである。戦前の奉納踊は軍艦と水兵さん達であったが、戦後は江戸時代各藩より入港してきた藩主を乗せた御座船の入港となっており、多くの町内の子供達が参加して賑やかである。

○**大黒町** その昔、入港してくる唐船の一番船は立山の下この町の前面海岸に止まり、次いで順次碇泊していたというので街は大いに賑わい、町内は川を境に右を大黒町、左を恵美須町と言った。その故この町の

事である。一五九八年(慶長三)には筑後善導寺の僧堅誉上人(浄土宗)が最初に佛教の布教を開始したが、旧市内での布教は困難であったので対岸の稲佐に当年来航していた佛教徒(唐船の人達)の援助を受け小さな御堂を造ったのが始まりだと言われている。

長崎に於ける最初の神社として、長崎市史(昭和三年序版)に次のように記してある。

「唐津立石村出生の威福院高順、慶長十二年(一六〇七)長崎に來り東中町筋違橋の辺に小屋を建て天満宮の尊像を安置したがキリシタンの人達により破却、同十五年高麗町竹藪の中に再建、再び破却され、元和八年(一六二二)眞言宗威福寺の名称で尊像を祀っていたが明治元年六月神佛混淆令により櫻馬場天満宮と改め現在に至っている。」

之に対し諏訪神社は一六二三年(元和九)唐津の豪族草野氏の一族で、佐賀龍造寺氏とも縁のあった修験者金重院賢清(青木氏)が長崎の地に捧持したのが諏訪神社の初めだと記してある。その社地については伊良林郷風頭の地であると伝承されており、その後一六二八年(寛永五)長崎代官末次平蔵の時、社地として現在の西山松ノ森神社の地を下賜され、一六三四年九月七日(寛永十一)現在の「長崎くんち」の原型となった氏神の祭礼が始まったと記してある。

そして、最初のくんちの祭礼を行った場所は、現在の松ノ森神社がある所で「傘鉾」はまだ造られていなかったと考える。「傘鉾」の事について大田由紀女史の「長崎くんちにおける傘鉾の変遷」という論考が長崎純心大学文化学会々報十二号に発表されているので御参考にされるとよい。

二、今年のおくんち奉納踊七ヶ町

○**紺屋町** 江戸時代の町名をみると紺屋町には本紺屋町、中紺屋町、今紺屋町の三ヶ町があったと記してある。長崎の紺屋は唐船によって輸入される白糸に唐船持ち渡りの染料を使い「トウジン クウヤ」の名称

傘鉾・奉納踊り共に唐船関係であるが、特に傘鉾飾りは「かげ大黒の趣向」が面白いと昔から有名だった。

また此の町の奉納踊り「唐人船の通り物」は先引きに多くの町内子供連中、それに付き添いの皆さん達の賑やかさで評判が高い。

○**樺島町** 土地の人達は樺島町と言え「コッコデショ」という。

シーボルトの名著「NIPPON」に長崎くんちの代表的だしもの一つにコッコデショの図がある程、有名だった。樺島町の始めは野母崎町の沖、島原有馬藩樺島の人達が長崎開港まもなく当時の舟津の入口に移住してきた人達により開かれた町であり、海運には関係のある町であったので、当時、長崎に入港してきた大阪堺の人達より「コッコデショ」は伝えられた芸能であるという。傘鉾飾りの**猿田彦の面**は、同町の乙名若杉家がくんち御興渡行の時に供頭に使用される同面を献上した事により、其の型を写し今に使用していると言う。

(校正・大東良平・末吉眞紀)

### 風信

○九月より本協会の**夏休み**も終わり次のように講座を開始しますので、御自由に参加下さい。(会費不要・資料代は各自)

一、**長崎学を学ぶ講座** 毎週月曜午前十時半より、講師は毎回不同(資料代二〇〇円)

一、**古文書を読む会** 毎月第一、第三火曜午前十時半より(指導 川原清氏、米田輝臣氏、久保美洋子女史の各氏他、後見 越中)

一、**水曜懇話会** 毎週水曜午後一時半より三時(江口淳二氏、吉田幸男氏、野口嘉弘氏、村本京女史、田川康子女史の各氏他)

一、**歴史茶話会** 毎月第二、第四金曜午後二時より三時(脇山壽子女史、太田靖彦氏、大東良平氏、木村忠氏を中心に)

一、清水寺より八月十七・十八日「千日まいり」案内あり、「ソーメン」と「人形いも」を戴きました。

一、長崎三山公帮より、九月五日より七日まで崇福寺にて恒例の中国盆の案内あり、金山、銀山、什綿菜の事。「好参拝為盼」とありました。

一、シーボルト記念館より、高島秋帆生誕二百二十年となるので、其の記念として九月七日より十一月十一日まで「秋帆がゆく」展を開催、御来場下さいとの事。(入館料一〇〇円、小学生五〇円)

